

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 樋口 恵

論 文 題 目

エリアス・カネッティ『群衆と権力』の軌跡

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	中村靖子
委員	名古屋大学教授	松澤和宏
委員	名古屋大学教授	宮原勇
委員	上智大学教授	北島玲子

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本論文は、エリアス・カネッティの『群衆と権力』を中心に、カネッティの戯曲を補助線としつつ、カネッティの思想を明らかにしようとするものである。

第一章「群衆論の系譜」では、カネッティ以前に群集や群集心理を論じた古典的論考としてニーチェの『善悪の彼岸』(1886)、ギュスターヴ・ル・ボンの『群集心理』(1895)、ガブリエル・タルドの『世論と群衆』(1901)、フロイトの『集団心理学と自我分析』(1921)、オルテガの『大衆の反逆』(1929)を取り上げ、それぞれの群衆イメージがどのような時代背景において生まれどう論じられてきたかを概略的に辿った。その上でヴィルヘルム・ライヒの『ファシズムの大衆心理』(1933)やフロムの『自由からの逃走』(1941)とも比較しつつ、カネッティの群衆論を位置づけた。カネッティはフロイトの『集団心理学と自我分析』について、群衆を個人と個人の関係に還元したとして強く批判したが、カネッティによるフロイト批判は、フロイトがタナトスという概念を提起した際にもっとも激しくなる。しかしカネッティが群衆形成の重要な要素とする「接触恐怖」は、フロイトの『トーテムとタブー』(1913)から借用されたものだと指摘する文献もあり、本論ではあえてフロイトの他の論考(『ナルシシズム入門』など)をも参照して論を進めている。

第二章ではカネッティの戯曲『結婚式』を取り上げ、カネッティ思想の鍵語となる「生き残ること」が権力の根源として描かれていることを示した。第三章では『虚栄の喜劇』を取り上げ、「鏡の禁止」がナチスの焚書をパロディー化したものであり、群衆が足音や拍手などのリズムによって形成されることを描いた点で、ナチスのプロパガンダが彷彿されることを示した。第四章では『猶予された者たち』を取り上げ、「生き残ること」への固執は、愛や変身という形で克服されうることを示した。

第五章では『群衆と権力』を取り上げ、第一章で確認したように、ル・ボンやタルド、そしてフロイトの論考では、群衆は指導者もしくは指導的役割を担う存在との関連で捉えられてきたが、カネッティはこうした二項対立をとらず、指導者不在の群衆のあり方に関心を持ち、むしろ少数者が群衆を必要とし群衆を利用することにより権力が生じるとした点にカネッティの論考の特徴がある。『群衆と権力』は独自のスタイルとしてもつ「非科学性」ゆえに従来位置づけが難しいものとされてきたが、それはイデオロギー化に抗するためにカネッティが戦略的にとったスタイルであると論じた。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

本研究の意義は、第一に、従来真正面から取り上げられることがほとんどなかったカネッティの『群衆と権力』を、群衆論の系譜において位置づけた点にある。ル・ボン以来群衆は破壊力をもった暴徒であるとか、「服従への欲望」に駆られた非理性的な存在という否定的なイメージで捉えられることが多かったが、カネッティは群衆を肯定的に捉え、「本来的で、根源的で、権力とはまったく関わりのない欲求としての群衆」という像を提起した。群衆というあり方において「絶対的平等の状態」が実現されており、それゆえに群衆は、増えること自体を目的としているという肯定的な群衆像はカネッティ独自のものであり、本論は浮かび上がらせた点で大いに評価できる。指導者のいない状態で形成された群衆は、しかし、これを利用して権力を得ようとする少数者の登場を誘発する。同時に、群衆において実現された「絶対的平等の状態」を固定し維持しようとするれば、その状態はたちまち否定的なものへと反転する。カネッティにとって群衆という形態はあくまでも一過性のものであるべきであり、これを利用して権力を得ようとする少数者の登場を許すならば、群衆は権力の発生の条件となる。これを踏まえて本論は、カネッティの権力論を「生き残ること」「命令」「パラノイア」「死に対する抵抗」という鍵語を中心として論じており、ファシズムの根源を捉えようとしたカネッティの思想の大枠を浮かび上がらせることができている。

第二に本論は、同じく従来あまり論じられることのなかったカネッティの戯曲を対象とし、これらを『群衆と権力』が提起した問題と関連づけて論じており、こうした形でカネッティの哲学的論考と創作的作品の両方を視野に入れてカネッティの思想を包括的に捉えようとした点で評価できる。カネッティの戯曲はいずれも難解で、上演されることも稀である。しかし本論は、カネッティがエッセーなどから、「音響的仮面」や、焚書を代理的に象徴する「鏡の禁止」、権力から身をかわす方途としての「変身」など、いずれも重要な鍵語をてがかりとしてカネッティの主要な戯曲を丁寧に論述しており、このことは審査委員たちから大いに評価された。

問題点としては、カネッティのテキストも含め、参照するドイツ語文献の日本語訳が既訳に頼りすぎており、解釈にも影響を与えかねないこと、群衆を論じた古典的な論考については従来の解釈を出るものではないことなどが、審査委員より指摘された。カネッティの思想はローザ・ルクセンブルクやフロイト、ハイデガーの思想との近似性をもっており、これらの論点は今後の課題といえるが、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。むしろこうした可能性を明らかにした点で本論は評価できる。以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。